

生田キャンパス70周年

小田急線の歴史掘り起こす

経済・永江教授 「沿線の開発と活況生む」



多くの市民らが聴講した

「鉄道沿線地域の発展は私鉄のユニークなビジネスモデルの下で進んだが、それは地域の人々との共同作業でもあり、駅はその象徴といえる」と語り、駅の設置理由を解説した。

ターミナル駅(新宿、河川駅(和泉多摩川など)、住民の要望により開設された請願駅(成城学園前など)、交差・分岐駅(新百合ヶ丘など)

生田キャンパスと縁が深い小田急線の歴史を掘り起こす講演会「小田急沿線の近現代史」なぞ駅はそこに作られたか」(専修大学・小田急財団共催)が11月23日、生田キャンパスで開かれた。沿線に住む市民など約400人が参加した。

生田キャンパス開設70周年記念事業の一環。日本経済史が専門の永江雅和経済学部教授が講演した。

駅が、登戸駅(当初は稲田多摩川駅)と並んで設置されたのは、当時の稲田村の中心に近い場所に駅が必要とされたからだという。

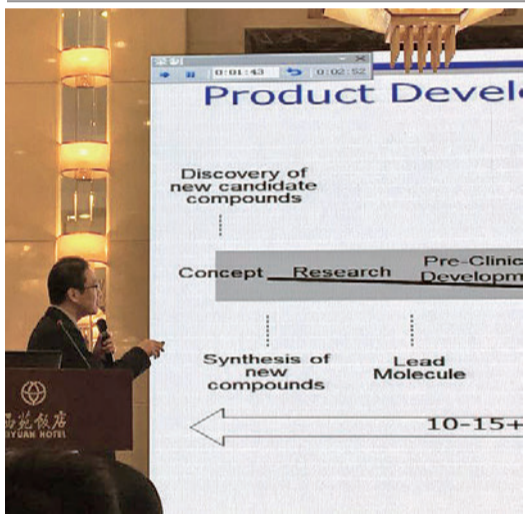
駅の誕生で生活環境も一変した。柿生駅では、名産の柿をはじめ農作物の東京方面への出荷が容易になり、周辺の開発が一気に進んだ。永江教授は活況を喜ぶ村民の様子を記した資料などを示しながら語った。

1927年の小田原線開業から1世紀近く。永江教授は現在、多摩地域でも人口減少がみられるとして「これまでとは違う新しい形の相互協力が、私鉄会社と地域に求められるだろう」と結んだ。

北京で第6回競争情報国際会議

商・高橋義仁教授が基調講演

専修大学と小田急電鉄(東京都新宿区)は2012年4月に産学連携の基本協定を結び、以来「地域と共生する小田急グループのCSRと事業戦略」をテーマとする奇壇講座を開講している。今年度は永江教授が担当



第6回競争情報国際会議(The 6th. International Conference on Competitive Intelligence)が、10月27、28の両日、北京大学、北京市科学技

術研究院の主催により、中国・北京市で開催された。商学部の高橋義仁教授が主催者からの招待演者として参加し、「How Successful Global Companies are collecting competitive intelligence」(成功しているグローバル企業はどのように競争情報を収集するか)をテーマに講演した。写真

「学びのまち」の変遷追う

サテライト・生田で特別展

生田キャンパスがある変遷を追った特別展「学びのまち」が、11月9日から28日まで専修大学サテライトキャンパスで



「学びのまち」となった多摩区発展の様子を写真、パネルで紹介した=生田キャンパス

開催された。専修大学創立140周年記念事業。生田キャンパス開設70周年記念特別展。キャンパスが開設される前の多摩区について、昭和初期の鉄道開通や大勢の親子連れなどにぎわった遊園地「向ヶ丘遊園」などの様子を写真や資料で伝えた。

遊園地「向ヶ丘遊園」のにぎわいを伝えるパネルを地域の方が感慨深げにながめた。サテライトキャンパス

東京の近郊農村だった多摩区が大きくその姿を変えたのは1927(昭和2)年の小田急線の開通。同時に「向ヶ丘遊園」もオープンし、稲田登戸駅(現向ヶ丘遊園駅)バス9号館1階で開催している。

路上喫煙・ポイ捨て防止キャンペーン



12月4日早朝、専修大学の学生が、小田急線向ヶ丘遊園駅周辺で「路上喫煙・ポイ捨て防止啓発キャンペーン」の清掃活動を行った。写真。

地域とともに

専大生22人参加

キャンペーンは川崎市多摩区役所危機管理担当など3団体の主催。参加した専大生は地域の防災防犯活動を行う学生団体のSIV(専修生田ボラティア)と、同じく学生団体の連合県人会のメンバーら22人。

川崎市の職員は「小田急線のほかの駅周辺でも急線のほかの駅周辺でもキャンペーンを行っているが、こんなにたくさんの方が参加する地域はほかにない」と話している。

志(こころざし)



最近、山口を訪れる機会があった。周りを山に囲まれ、時間がゆっくりと流れているように、まさに悠久の地と感じられる。こ存じのように、150年ほど前に明治維新の中心となった方々が名を連ねた長州である。江戸から離れること約1000キロ、新幹線・飛行機どころか自転車さえもない時代、移動するには、自らの足で一步一步、歩み続けねばならない。もはや、想像することも憚られてしまう。ただ、ここには維新の魁となる礎もあったようだ。

それは、松下村塾、そこに在りては、松州藩の藩主、毛利敬親。敬親「精神一到何事か成らざらん」と、まさに命がけで志を遂げようとしたのだから。そうと答えるのは、寛大な中にも信頼と志があったことだろう。ペリ来航時には、実際に松下村塾では「志」をとても重要視していたという。これは、大学においても相通することであり、ふと辺りを見回して、自分も省みてみた。時代が違っても思うが、さて、何が違うだろうか？ やはり、「志」なのか。あなたの「志」はどうですか？ (学生部委員・本田竜広)